

俗耳談

市川寬齋口話
柳川通故筆

三篇卷一

特別
45
1420
6



門 45
號 1420
卷 6

俗字 改三編卷之一

藤波氏藏

書印

昭和二十八年
二月二十四日
購求

問凡

柳川通故筆

一問凡の字音らん、説文風の字从虫凡聲鳳の字
从鳥凡聲之れや、凡の字音らん、鳳の字音らん
風鳳の字音らん、凡の字音らん、凡の字音らん、
一、凡の字音らん、但釋名云風克豫司横口合辰言
之風記也、昔徐言風、跋口、開唇、推氣、高之風、故
也、これら、凡の字音らん、二、凡の字音らん、
一、鵠一名魚虎、一名魚師、其柙曰魚師、師師子

乃所云々つげらるる乃虎少らるる此云々
即此所云々也

一人此等云々也
仲游與東坡書曰大言語之
累不特出諸口者為言其形於詩歌贊於賦頌託
於碑銘著于序記者亦言語也今知畏于口而未
畏于文是其所是則見是者喜其所非則蒙非
者怨喜者未必能君之謀而怨者或已敗君之事
矣之此語有あるは詞人と戒ひしものなり

了る者亦此也一文字ハ此云々也
石吾と云け侍るは此と想ん
乃通んて此也

一凡此物之れと倉庫ハ何じ者方部界格ハ棚り
安んて相混雜ハ此云々也
不事後也

とてふや高くと忽ちつ是素^{モリ}産する物の實りると一物ゆりや
 あくす産人の物とよみおしこれと多産よんねん産も亦取し是
 川く後中一物多きと安きや高ふた一矢ししく安き也
 物多しと亦自あしんは亦お女しりとの世多しな高と知
 亦多ぬしと高と亦と亦不安し

一枕の字木ふゆの芝木まらせし任音義云西^方無
 枕用皮氈布貯以兜羅綿為枕これ草のくま枕より
 こふらぬ染の枕木多ぬ
兜羅綿俗よなぬし
 高のあまの綿たよりけ
 高し織るものの中

一昔大坂の石地を敷きくくと長ししは柳のここれと
 研て乃下しとよるくまらぬ敷きけりまらぬ
 田中逢後木佛の安^レ動^レモドモ安とんは即ち多即ち初
 怯^カより彼初く初ゆははり所しして除初くあふれしあ
 じりしとくまら

一民業常の依扱すりあつて園くまられ村まらり農多
 工これあつく商の依扱多しと園くまらぬわとぬ名と
 下りふ知りる皆道傳曰夫用資求富農不如工工不
 知商刺繡文不如倚市門此言末業貧者之負^{たつ}

一 信小園繪宝鑑あり中華の橋本信圖宝鑑あり

一 残太平記の振夷の事は下云い流る韃靼國へ海法

六十里と阻て通流しと流るると其地は遠東の地

乃北の地喜の松丹の地松丹の夫作の夫作の事

朝鮮より歴史の事と云れ大抵はけりふやふとゆ

らる韃靼ありは、まて振夷をくまてまてまての國

といふるが振夷より六十里海流より、いふる

一 此れ名ありあけりあるもあるけりあるまて

く、これ等より華言の曙曉昧爽昕晨の事なり

子墨も但日といふはあの名なり且九朝の日出るの

名なり皆あきなり日言ての名は、いふると云れなり

信ふかまが時しふ吾々信ふ又吾々信ふしふと云ふ事の

昏の事なり暈も同言の日将入の事なり夕の事なり

指し多しと云、いふるの字は昔の事なりと云れなり

朝晩も且晩も用いりる事なり早の事なり一日の

中よりと云ふは、いふる

一 家傳の和方六首よりありと井桂抄よりありとこれ

よりとの又事なりと云、宋の梅聖俞の一日一首の詩と

此の如し出書と志はうにおも二万いん九華術工下
小名とほくくくつひくうんてはくくとのととてれ其
煉成れ工又それざりたり

一電の所るそ大と大極とくくふりて大なりいをき
漢書に載り武帝元封三年兩電大如馬頭宣帝地
節四年兩電殺二十人皆鳥皆死鴛子の女くく人
と殺し死るに女はくく死るに女はくく死るに女はくく
折鶴子の久尚疑ふくく死るに女はくく死るに女はくく
ろくの色くはくく死るに女はくく死るに女はくく死るに

天凝るふくくも百里もをくくふりてくく死るに女はくく
電の雷の鳴る所くく雷地と去るくく死るに女はくく
大くくも凝るのりもをくくくく又くく死るに女はくく
殺すもふくくたといふくくも是抑るに女はくく死るに女はくく
くくくく死るに女はくく死るに女はくく死るに女はくく
くくくく死るに女はくく死るに女はくく死るに女はくく

一國進或大夜寝と東子廣く見んと欲してそは小倉子
對て日今く東方金神より起るくく乃止む望も又取
て曰事より起るくく西の向く工と始るに女はくく死るに女はくく

昔仁宗帝東華門と祈せんとす太史言ふ大歳東より
祀すといふ帝曰東家の西の西家の東西家の東東家
乃西大歳何ふと立天工と興一と忌むとふれこさ
お仰るまうぬれと仁宗の沈の女も古4の沈と破
て唐よりよのこり来りて一とあふいふとあふ沈
いとい古沈と破りす古古物りす英名あふと破
一とふれぬる荷りてふ蓮とぬぬる蓮の實りぬ
是も華人も蓮とぬぬるとり周茂叔愛蓮沈
或の妙法蓮華經等といふ蓮とぬぬる蓮もぬぬる

一水邊曰涯 曲涯曰澳 亦曰隈 澳隈もにくまに
是水の涯の曲とぬるふりあふ中とり同じ秋の月
かふまのしとふの美揚月の中よりそ如月中の曲
ぬれぬぬるふり倍に光れぬるぬるのやふり
形よりぬぬる星ふくまふりしり中揚り星のふり曲
さあるとるふり又さふぬるふり
一物とぬぬるさあふり也 花折る不除く論とぬぬる
さうぬぬるさあふり一とぬぬるぬぬる且傳風さふぬ
ぬぬる小字あり也又さあふりぬぬるぬぬる 某少の益さ

ありく逆ぢとみく遺楹正凡書と漢のふことと多のこは
寓する自中の一是後氏寤儻堂祀の甚堪かつて某
按後氏自心とつけくこの又とむらうとこととむじとん
しとむ他とやんりんにあつと

一中軍の北邙山は山多山の女一死をて葬るをして洛陽
かをくぬつ王建北邙行詩ハ北邙山頭少關土盡是
洛陽人爲墓つれよ多山の地とつこのことと
多山の墓ふくくかむやがくくはあまうこの墓と
歴くくくく凡葬て研とまは後人そ此と侵すこと
凡れ

のありて葬人の福名と埋くく永くて此に死をのどと
むつれいやり上ふ果り埋くくはれよ字をれと極の
久くいつれ傾き又倒し又いふををらやむして其國化を
又他人と埋じもさうし他をさいばとむいて其をれと
らあつれをわく一凡れ老の碑をれさうとのさくほり
これのけくさあふ他人と葬るふに墓碑はらるるさ
張籍北邙山の詩ハ千金立碑高百尺終作誰家
柱下石これ累人さうさく市ハ出るあさうさく高
其墓さくくのみとあつて一はらるる自哀くあひや

一 言ふ所の縁の遠かりある櫛子と明らんとよみこみ成
鉤欄と云ふ事文別集の云々俗に櫛と云ふは
一 連用の字毎人の連用と上下するものなり
日月風雨山海黑白水火鼻目竹木鳥爲冬夏寒
暑等の連用を云ふはこれし口ソいやすきなり
口ソいやすきなりゆへに例にうきなりは流のちり
りありありなり

一 四ノ字の風ノ字一拾遺記云四面風者東西
南北一時俱起也云々又颶風と云ふは

五六月の香々といふはふ合うこれの最南の字也
一 問始りたる書先七日の佛と云ふは冥魂と云ふは
く止む七のぬるは日何のなうく七のぬると云ふは
て申す再法の新し留書日札日人之初生以七日為
臘人之初死以七日為忌一臘而一魄成故七、四十
九日而七魄具矣一忌而一魂散故七、四十九日而
七魂成矣ことごとくこれに下るるとりて
四、人生く初七日を候て七本と云ふ死の七日忌と云
て初と云ふはことごとく七と云ふは死の七日忌と云

九月の終に郡の北の申の傍より教へく信するの七と
うまに古より人よりうまに七^印と信するの七とある。

一 儂とこりやうと訓多陰の對するこりやうとこれと細微なる

ハ惟く但こりやうといつと細微のうまにうまに儂なる中らう

一 莊子外物篇云乃焚大槐口義云不曰他木而曰

槐者槐能生火故以槐言之淮南子老槐生火は

國の人槐の火と生ずるといふや唯扁柏能火と生ず

ふ故いのみとよみ人といふ木の火と生ずるはいふ又

い圓圓柏火出でるは徑流の心木かやうと云ふる否

ヤと知るは井の人を試達するも亦知る

一 脚氣の山の下にふたなるものと云信するの某は甲斐

の七旬山の中をうらむのまをうらむは脚氣と云ふ

借り肩からりきくヤリく山と下り或曰てなるは

しく一二所も返り上る一逆ぬめ一徐くく下り

却進するのと付置後試いすや那うかよの人の信する

る一或もなるん

一 問字古とあるは燕歌雜難とすくは極やと信する曰

知り知れもふとせらるる、藤子美夏中詩に庭下陰後

燕引雛とあれ、雛字通用す。一〇〇〇〇 穀の字、唐く
用いゝるまゝなり

一 同世の瘰と多しと云ふ。死せずといふも、死して曰くす。
醫の字、了。但瘰もふと記す。よきもくし、今もよ
と粘く、よきもくし。後、死^レれが世と予、粘^レくもくし、よきと
よりし、出^ル唯、死^レの會、くもくし、死^レれ、割^レ、也、死^レれ
ん、く、南史、不載、朱、鈴、石、く、四、第、流、氏、死^レ、大、癰、也、鈴
石、眠、く、何^レ、密、これと刻^レ、即、死^レ、れ、れ、此、死^レ、く、換、り
信、是、く、換、り、く、く、一〇〇〇〇

